

翻刻『怪談実録』(三)

本誌48、49号において『怪談実録』巻一から四を翻刻した(巻一・二は人間言語専門演習Ⅰの成果としてのもの、巻三・四は藤沢私稿としてのもの)。本稿はその続きとして、巻五を翻刻する。

底本とした広島文教女子大学所蔵のものは後印本であるが、本文においては、初印本と思われる京都大学附属図書館所蔵本(47-カー6、旧大惣貸本)と差異はなく、入木による修訂は見出しえない。また、底本には版木の欠けや摺りの掠れが目立つ箇所もある。京都大学附属図書館所蔵本には見返しはなく、刊記は、

明和三年丙戌正月吉日

日本橋通一町目

須原屋茂兵衛

江都書林

同 伊 八

藤 沢 毅

日本橋数寄屋町

天野屋甚 八

となっている。一方、底本の刊記(裏表紙見返に貼付)は、

此書はゆゑあつて久しく世にもて遊ばず
今其かけたるを補ひ附言して再び
発行することゝはなりぬ

文政七甲申秋

明和三丙戌春

刻成

文政七甲申秋

求板

丁子屋平兵衛

前川六左衛門

前川弥兵衛

である。前述のように本文に入木修訂箇所は見出しえない

かつたので、「かけたるを補」つたという箇所がどこを指すのかはつきりしないのだが、見返、刊記のみの補刻と受け取ってよいのかもしれない。

■底本略書誌

広島文教女子大学所蔵本 (913.56 ナ 1~5)

明和三年刊、文政七年印

半紙本五卷五冊

表紙 淡桃色 模様なし

外題 左辺双郭

白地に墨印で「近世怪談実録 一(五)」

蔵書印

墨色長円印「越喜」

横長方印「稲葉文庫」

■凡例(翻刻の方針)

・平仮名は現行の対応する平仮名に統一した。漢字であっても、仮名字母であり仮名として表記されているものは平仮名にあらためた。

・「二」「ハ」「ミ」など、一見片仮名のように表記されているものでも、平仮名として扱われているものについては平仮名とした。

・漢字については、作者が意図的に字体を変えて使い分けしている箇所もあるのだが、基本的には通行の書体に統一した。

・原文には読み継ぎのための白丸点が付されているが、これを現代の文章の句読点に置き換えた。原文にない箇所に句読点が必要と思われた時には句読点を「」内に入れて補った。

・私に「、』」を補い、また私に段落を設定した。

・振仮名は原本にあるものの中、現在我々が読む際に必要あるいは便利と思われるもののみを採用した。すなわち、かなりの量の振仮名を省略したわけだが、原本の状態をなるべく残すことによる利点よりも、入力並びに校正の労を省けるという利点、また、かえってその方が読みやすいという判断からの措置である。

・明らかな誤記、誤刻も基本的にはそのままの形にしたが、そのために意味が不鮮明になる場合のみ、該当字の右あるいは下の()に正しい字を置いた。また、文字等が欠如している場合(印刷上での欠如を含む)は、京都大学附属図書館所蔵本を参照して「」に適切な文字等を補記した。特に稿者の入力ミスかと誤解されやすい箇所には(ママ)を付した。

■翻刻

怪談実録卷之五

回国老僧の話

朋友何がし「〔 〕宝暦の末、八十余歳なりしがかたれり。

三十四〔 〕五年以前に紀州より出し老僧の東都へ来りしにあひたり。此僧長寿にて、其時百二十歳までは覚えしが、其余は六ツ七ツもあるべしといひし。わかかりし時、日本回国を思ひ立、それより三度回国せし由、

「長寿さへためし稀なるに、三度回国といふは、未曾有の事といふべし。其間には、めづらしき事、あやしき事などをも見たまひつらん。語りたまへ」といひしに、

「旅はもとより草枕といへば、野にやどりては、露に衣をうるほし、山にふしては、嵐に夢もむすばず。ゆくへ定めぬ雲水に身をなし、至らぬくまもなきやうにおぼえ侍れど、めづらしき事としては、古より名高き所々、山の姿〔 〕川のながれさまぐなれど、是も人の知れる事。あやしき事としては、魑魅魍魎のたぐひなれども、さるものに出あひたる事侍らず。しかれども、いまに不審はれざる事あり。東海道を通りし時、藤枝のほとりより、山にそひてまはりしに、道にふみまよひ、はるぐ来ぬるとおもふに、人家も

見えず、日はくるゝ〔 〕『いかゞはせん』とたゞずみしに、はるかむかふにもしびかすかに見えし故〔 〕『人里に近づきぬ』とうれしくて、足にまかせて行て見れば、村にはあらでひとつ屋なり。『何にもせよやどをかり、夜をあかしてこそ、道を尋ねぬ』と、立よりて一夜の宿をこひければ、はたちばかりの女房のいとうつくしきが立出、「何人にかは」ととふ。

「是は回国の僧なるが、日くれ道にまよひ、ともし火の光をしるべに是までまいりたり。ねがはくは一夜を明させてたびたまへ」といへば、女房つくぐ見て、

「老僧のさぞなつかれたまひつらん。おやどまいらせたうはさぶらへども、あるじ外へ出て、いまだ侍らず。みづからがはからひにて、お宿申がたし。されどこゝははなれ屋なれば、ほかへとも申されず。しばらく是に待たまへ。あるじの帰らんもほどあるまじ」と、柴などつみおくやうなる小屋へ入置ぬ。やゝありて女房来り、

「夜ふくるまゝに寒さいやまされり。さぞわびしくおぼすらん。あるじはいまだ帰らざれど、老僧の御事なれば、何かはくるしからん。こなたへ御入候へ」といへば、

「いや此身は野山におきふしなれしことなれば、寒きをも

いとひ侍らず。今よひはこゝにやどりて、霜露にぬれざる
こそうれしく侍れ」

といひければ、

「わかき人こそはさもあらめ、ひらにこなたへ」

といざなひて内へ入レ、たき火にあてなどし、

「夜も更ぬべし。しばしまどろみたまへ。あるじ帰りなば、
あやしき事ありとも、必おどろきたまふな」

といひて、おのがふしど「へ」入ぬ。

『さてはあるじといふは、山賊にてや有「らん。」よし「。』

それとても、捨身の境界なれば、おそるゝにたらず』

と、かたはらに臥たるに、そともに「人」音しければ、『す

はあるじの帰りしよ』と、いねた「る」やうにてうかゞひ

るたるに、とぼそを開き内「に」入を見れば、廿七「に」

八ばかりにて、すごやかな「る」男の、いろ白く、勇気面

にそなはり「たるが、」弓矢をたづさへたり。女房立出、

「こよひはおそく帰らせたまふ。君にはいかゞ御入さぶら

ふや」

と問に、

「御気色うるはしくおはしませり」

と答ふ。さて女房、

「よひに回国の老僧、一夜の宿をこひたまふ故「」いたは

しく思ひ「」とめまいらせし」

といへば、



「僧はくるしからず。よくこそとめたまひつれ。我もあはん」といふにぞ、女房よろこびよび起しける故、今日のさめしやうにもてなしておき出しに、あるじもねんごろにいひて、「よひより何にてもまいらせたるや」ととふ。

「いまだ」

といひければ、

「さぞ飢たまふらん。山中の事にて、まいらすべき物もなし。是を」

とてとり出せしを見れば、稗をかきたるやうにて黒き飯なり。

「是は我らが常にくふものなり」

とて、我もくひてさし出せしを、飢しまゝにとりてくひけるに、其味甘美にして、稗に似て稗にあらず。桃源の胡麻飯もかくやおもふばかりなり。さて主にむかひ、

「まことに一樹のかげのみか、一飯をわかちたまはる事、いかなる因縁ぞや。此御情いつの世にかはわするべき」。「さるにてもあるじはいかなる人にましますせば、かく山ふかき所にはおはすらん」。「御名をもあかさしたまへかし」といへば、

「我は世をしのぶものなれども、出家の御身にしあれば何かはつゝみ候はん。かならず人にばし語りたまふな。人かすならぬ身なれど、聞も及びたまひつらん。鈴木三郎とい

ふものなり。判官殿「」今蝦夷にまします故、我々かよひつかへ奉る」といふ。

「それは遙に世を隔たる事なるに、御身の容貌三十にもたらざるやうに見え給ふは、神仙の道など修したまふにや」と問しに、かの男笑ひて、

「さることも侍らず」。「亀井」「片岡」「武蔵」「常陸なども今にながらへ」「国々に居て判官殿へ勤仕いとまなく候。よしなき物語に夜もいたく更ぬれば、御休候へ」とて、夫婦も入ぬ。夜あけて又例の飯をすゝめ「」

「はや御帰候へ」。「さりながら此所は山深くして、たやすく人里へ出たまふことなりがたからん」。「あなひをつけ候はん」

とて、大なる石の手水ばちを、手してまろばしけるに、ころ／＼とまろび出ぬ。

「此石に従ひて出たまへ」

とて、いとまこひてわかれけり。此石おのれと山へのぼり谷に下り、二里ばかりも行しが、そこにとゞまりし故、其あたりを見れば、往來の道有。ふしぎなる事とおもひ、石にむかひて、人にいふごとく謝礼をのべければ、又まろびてもとの道へ帰ると見えしが、かたちなくなりけり。よべよりの事どもを、つくぐ／＼あんずるに、狐狸のなせしわざかとおもへども、さにもあらず。世にいふ仙境なるかと

語りしといへり。

ある人此話を聞て、

「其僧百二十歳を越しといへば、老耄にてかゝる妄言をなせしなるべし」

といふ。予おもへらく、ふかく物を疑ふはよからぬ事なり。又人の言を悉く信ずべきにもあらず。事によるべし。かくのごときたぐひは、しひて真偽を正さんは、むやくの事なるべし。たとひ虚談なりとも、世の害にならざる事なれば、其まゝに聞てあるべし。信疑は人々の心にまかせて、敢て是非を論すべからず。又かゝるたぐひの事、必なしともいふべからず「。」

醫師欺れて辱を受

東都芝辺に、何がしといふ医工あり。壮年まで娶らず。天性異人にて物にかゝはらず。常に有無をはからず。糧尽れば、隣家へゆきて食し、金を得れば、亦隣家へ分ちあたへ、空囊にして貧をしらず。医学に精かりければ、生徒衆く来会、履戸外に盈り「。」

或時市中の者来り、

「某は此あたり近く住居仕る者なるが、折を得ずして、御知人になり申さず。卒爾の至に候へども、推参仕候」といひければ、

「よくこそ来りたまひたれ。先ヅこなたへ」

と内へ入レ、四方山の物語などし、

「さて今日参候は別儀ならず。某御用を承る或御大家に重き御病人あり。貴公の御事御聞及なされ、招よせられたく思めせども、仰入レらるべき伝もなき故、某へ御頼なり。御出下さるべきや」

といひければ、

「我等ごときの庸医、御大家の療治おもひもよらず。しかれども家業の事なれば、辞退も申がたし」

といへば、かの男よろこび、

「さあらば某御供申べし。早速御聞届下され大悦仕れり。今日はじめて参上故、寸志の持参御目にかけてく候」

と、もたせ来りし山遊提合酒盞など、持出ひらきければ、あるじもとより嗜、好のものなれば、

「こは御深切の御持来着」

と、それより飲はじめ下物も品々ありければ、たがひに盞の数もかさなり、夜に入まで飲つゞけ、あるじ大に酩酊に及び、枕引よせ人心ちもなくいねければ、かの男用意の轎へいだきのせ、いそがせける。かの医途中にて目を覚し、『さてはいつのまにかは迎来り。酔まぎれにのりたるをも覚えざりしよな。さるにてもこゝはいづくなるらん』

と、左右を見れども、見なれざる所のみにて、山へのぼるかとおもへば平地へ出、橋をわたりなどして、大なる林の内へ入、そこに轎をすゑ、六尺あまりの大男二人、

「法師出よ」

とて、左右より手を取りて引出す。医師大に驚き、

「其方共は何ものなるぞ」

といひければ、

「何ものとはおろかや」

と、短刀を奪取、帯をとき犢鼻褌までをはぎて、赤裸にして、

「命をばたすくるぞ」

とて、行かたしらずなりけり。

『こはたばかられる。「口をしや』

と、断をなせどもせんかたなく、酔醒の事なれば、寒さ

堪がたく、行べき道はしらず、往来の人もなければ、問べ

きたよりもなく、あきれはて、居けるに、むかふより吊灯

の見えければ、うれしくて、近より見れば、使にゆくとお

ぼしき中間なり。

「もの申さん」

といへば、

「汝は乞食なるか。何ものぞ」

といふ。

「某は何がしといふ医師なるが盗賊にあひてかくなれり。

送りてたまはらば謝礼はのぞみにまかせん」

といひければ、中間打わらひ、

「其有さまにて、謝礼とはをかしや。されど不便の事なり。

さむさ堪がたからん。まづ是を着よ」

とて、おのれがはをりの垢じみたるをぬぎて借しければ、おぼえずいたゞきて、「御情忝し」と着し、あたりにおりし縄ぎれをひろひて帯にし、中間があとにつきて行しに、田舎の村とおぼしくて、両三家ありし中に、空室のありしに入置、

「こゝにしのび居て、また我が来るをまて」

といひて、いづくへかゆきける。こゝにしばらく居る間に、

其合壁に人声のするをきけば、博徒のあつまれるなり。か

べのくづれよりさしのぞき見れば、いづれも色黒くたくま

しく、髭のおひたるもあり。鬼ともいひつべきものどもな

るが、その中にさきの盗賊ども、居たり。灯のあきらかな

るによく見れば、おそろしきこといふばかりなし。一人が

いふやう、

「さきの医者を不便におもひ、いのちをたすけしが、よく

／＼思ふに、そのまゝおかばわれ／＼が後のあたとなるべ

し。いかゞおもふぞ」

といひしに、中にもことにすさまじき大男のいひけるは、

「さればこそはじめにころせとはいひつれ。汝むやくの情

だてしてゆるし置、今さら後悔するは何ぞや。かれは此所

の地理を知らざれば、今猶かのあたりにまよひ居るなら

ん。さがし出して殺すべし。やせ法師一人をひねり殺さん

は、雀をしめころすよりもやすけれど、方々手わけをして

尋ぬべければ、みな来れ」

とうちつれて出行ぬ。是を聞て魂身にそはず。『何となりゆく身のはてぞ』と、いきたる心もなく、只心中に産土八幡宮を念ずるよりほかの事なく、息をしづめて居たるに、最前の中間来りて、

「いかに法師は居るか。いざともなはん」

といふに、少し力を得、かの者どもがいひし事どもを語りければ、中間しばしあんで、

「汝此所の方角を知らざれば、遂にはさがし出さるべし。我おもひよりし事あり。此道をすぐにゆけば小川あり。水きはめて浅し。こゝをわたりてむかふに邸あり。是へなげきたのみなば、たとひかのものでしたひ来りたりとも、よもわたさるゝ事は有まじ。我は是より帰るべし。さきにかしつるはをりをかへせ」といふ。

「此はをりをぬぎては、恥かくさんやうもなし。とても事に今しばしかし給へ」といへば、中間いかりて、

「汝が死をまぬかるべき道を教しを大恩とおもふべし。行へもしらぬ汝に、何故にかそのはをりをあたふべき。とくかへせ」

とて、引はぎてわかれゆきければ、またもとの赤はだかになりてをしへしごとくにゆけば川あり。是をわたるに、水のひやゝかなること、脛もきるゝばかりにおぼえて、『い

かなる故にかかゝるからきめにはあふことやらん』と、やうく向の岸へあがれば、白壁の月かげに見えしうれしさに、立より見れば此あたりに有べしとおもはぬ大なる門あり。しかぐのよしいひ入れれば、門卒どもいふやう、「かれは必盜賊の手引するものなるべし。此ほどもさる事ありと聞し。そのがすな〔。〕なはかけよ」

といふまゝに、是非のいひひらきをもまたず、いましめて引たてゆくは、穀鯨の牛にことならず。有司と見ゆる人立出て、「是へあげよ」といひければ、大厦のきらびやかなるに、蟬燭かずしらすともしつらね、白昼のごとくなる真中に引すゑたり。正面には簾をかけ、女房の透影あまた見え、笑ふ声聞ゆ。此時の心おもひやるべし。其時、有司始終の事を尋問ければ、ありのまゝにいひければ、「さこそあるべけれ〔。〕とがなきものなれば、いましめをゆるせ」

とて繩をとかせ、「衣服をもて」といひければ、白小袖、無紋黒ちりめんの小袖、同じはをり、上下の帯ともに持来りぬ。「それ着よ」とてきせければ、夢かとおもふばかりにて、有司へむかい頭をさげ、有がたきよしを申せば、「かれにもくはせよ」といへば、膳を持来りしに、佳肴美味数を尽し、平人の膳にあらず。椀及び食盤器皿、尋常の物に異なり。腹中空虚なりしかば、飽までくらひて、人心ちになれり。



其時有司〔一〕

「此者は大卑怯者なり。かれが手にふれし食器はけがらしければうちくだけ」

といひ付けば、「畏候」と椀盤湯鼓に至るまで、悉くふ

みくだきけるを渋紙に包ませ、それをかれにあたへ「宿所を尋送かへすべし」といひ付けければ、轎にのせ、其上を桐

油にてつゝみ、渋紙づゝみをも取付、又はじめのやうに山坂をこえ、二〔一〕三里も行つらんとおもふ所にて、「是より宿所へ行べし」とて、轎ともに捨おきて、送の人は帰りぬ。桐油を押のけ、やうくはひ出て見れば、我宅の前なり。

いまだ夜も明ざれば、見とがむる人もなく「内へ入ん。渋紙包もこゝにおかんは見ぐるし」と内へいれしが〔一〕か

のふみくだきし器のやうにもあらざれば、ひらき見けるに、宵にとられし衣服短刀など、一品も失亡なくつゝみて

あり。もらひし小袖は身に着しぬ。さても夜中死ぬばかり

〔二〕うきめを見し事、狐狸のわざにもあらず〔一〕いかなる事なりけん」と、嘆息して居る所〔へ〕、何方よりともな

く使来り、白銀三十枚に一通をそへ差出せり。披き見れば、

「夜前の遠方御出、殊二御苦勞千万御大儀二候。仍而致進

二覽之一候」とありて名はなし。使のものはいつ帰りしにや見えずといへり。

是も怪談といふべし〔一〕。

怪談実録大尾

此書はゆゑあつて久しく世にもて遊ばず
今其かけたるを補ひ附言して再び
発行することゝはなりぬ

文政七甲申秋

明和三丙戌春

刻成

丁子屋平兵衛

文政七甲申秋

前川六左衛門

求板

前川弥兵衛

(ふじさわ たけし 尾道大学助教授)